

4 研究開発の進捗状況—目標の進捗状況分析

4.1 生徒の変容—SGH 生徒アンケート分析

アンケート回答数 n=371 (前年 n=356)

4年 n=122、5年 n=124、6年 n=125

※n は回収時欠席者等を除く件数である。

特徴的傾向

- ・ 外国語資格取得者・保持者数は減少しているが、依然高レベルを保持している。
英検1級取得(保持)者 92名/回答総数 371件中
英検準1級取得(保持)者 104名/回答総数 371件中
- ・ 生徒のメタ認知としてはポジティブな評価もネガティブな評価もいずれも増加傾向で読み取れる。これは研究過程で多くの経験を積むことで自己理解の深化が進んだものと考えられる。
- ・ SGH 指定後に高校生となった生徒の到達レベルとしては一定のゴールにたどり着いたものと思われる。

今年度も昨年度に引き続き3学期に後期課程の生徒を対象としたアンケートを実施した。

内容は昨年度のを継続し、学校全体で使用しているクラウドウェア Office365 (マイクロソフト) のアプリケーション「Forms」と紙ベースでのアンケートを併せて使って回答を回収した。回答回収の都合上、今年度の表については原則として4年生～6年生の数値を合計したものを、前年度までの4か年分と比較して示すこととする。

【1】取得した英語検定の級

過去4年分(4年～6年)	3級以下	準2級	2級	準1級	1級
平成27年度	9	59	100	62	55
平成28年度	13	58	85	64	60
平成29年度	99	125	169	120	102
平成30年度	118	145	190	132	93

令和元年	3級以下	準2級	2級	準1級	1級
6年(今年度)	0	1	7	4	1
6年(これまで)	50	56	63	38	39
4年・5年(今年度)	2	3	18	16	10
4年・5年(これまで)	48	59	78	46	42
総数	100	119	166	104	92

<分析>

・すべての級で取得者が減少している。特に「今年度取得」の人数減少が顕著である。(過去の「今年度取得」は過去報告書を参照)

この原因としては2つ挙げられる。一つは大学入学共通テストにおける英語の外部民間試験の存在を指摘したい。この制度の下では、有効な取得スコアには期限が設定されており、事前に取得したスコアでは入試に使用することができない。ゆえに後期課程の任意の時期に取得していたものが、特に4、5年生において大学入試センターの指定する時期に受験しようと考え今年度の受験を見送ったと推測できる。これは最終的には2019年11月1日に20年度の実施が見送られることが文部

科学大臣から発表されたが、時期が時期だけに今年度の影響は大きかったであろう。

もう一つに、英検の SGH 割引が今年度は無かったことを指摘する。現在の経済環境の中において、検定試験の受験料は高額である。特に上級になればなるほど受験料は上がる。だからこそ SGH 割引の存在は非常に大きかった。昨年まではチャレンジングに複数回受験する生徒が多かったが、今年はきわめて少なかったと本校外国語科の教員が感想を述べている。外国語の学習において、資格を取ることそのものが目的ではないのは事実だが、資格試験に挑戦することで得られる学力があるのも確かである。国の財政支援の必要性を改めて強く主張したい。

【2】英検以外での外国語資格受験・取得状況（令和元年度分）

	TOEFL	TOEIC	GTEC	国連英検	IELTS	TEAP	仏検
平成 27 年度	48	40		1	4	0	6
平成 28 年度	44	32		11	3	0	13
平成 29 年度	66	48		8	9	2	28
平成 30 年度	59	31	49	10	14		11
令和元年度	46	25	5	3	19	10	6
	尼検	西検	伊検	中検/HSK	TOPIK(韓国語能力試験)	JLPT(日本語能力試験)	独検/DAF
平成 27 年度	1	2	1	2/3	1	0	3/2
平成 28 年度	1	0	0	0/4	0	1	8/0
平成 29 年度	0	1	1	5(合算)	2	1	3/0
平成 30 年度	0	6	0	3	1	0	2
令和元年度	0	4	0	6	9	0	3
	露検	伊検	DELTA	ELF B/Junior	TOCFL		
平成 27 年度	1	0	0	1			
平成 28 年度	0	0	0	1			
平成 29 年度	0	1	1	0			
平成 30 年度	0	0	0	0			
令和元年度	0	0	0	0	1		

以下に英語の資格取得者の内、最も高いスコアと級を示す。

- ・ TOEFL IBT 最高点 = 118
- ・ TOEIC 最高点 = 990 (=満点)
- ・ 国連英検 取得級の内最も高いもの = A 級
- ・ IELTS 最高点 = 8.5

<分析>

・ 英語の資格については IELTS と TEAP の受験者数増加が目立つ。これについては大学入試の外部検定試験として IELTS や TEAP を採用した大学が増加したことが理由と考えられる。一方で全体的な減少傾向は英検の分析で述べたことと根底は通ずるところがあると考えられる。

それ以外に目立つものとして HSK や TOPIK など東アジアの言語検定の取得者増加が挙げられる。いずれも過去最高の人数であり、英語以外の多言語検定資格の取得者も一定数いることを鑑みると生徒の興味関心の対象は英語圏のみならず全世界に向けられているのではないかと推測される。「グローバル」を冠する事業として極めて良好な影響があったと考える。

【3】今年度における海外への渡航経験

	旅行	留学・研修(1か月以下)	留学・研修(3か月以下)	留学・研修(1年以下)	ボランティア	調査・研究	国際大会参加	その他(進路関係)	ワークキャンプ
平成27年度	97	31	0	26(+留学中13)	7	9	1		126
平成28年度	91	64(+留学中16)			8	8	0		130
平成29年度	97	69(+留学中8)			3	10	10	17	134
平成30年度	105	63(+留学中11名)			6	8	6	7	127
令和元年度	104	62(+留学中9名)			9	5	2	13	134

<分析>

・今年度における海外渡航経験は全体的に微減である。そのなかでも留学・研修の減少が目立つ。一方で大学進学を念頭においた大学見学などに出かけた生徒は昨年度よりも増加しており進学に向けたキャリア形成として実際の行動に移した生徒が一定数いることが分かる。

【4】今年度の活動を経て海外に行きたいと思うようになったか(目的別)(複数回答可)

	旅行	短期留学	1年以上の留学	海外進学(大学院を含む)	海外で働く	いいえ
平成27年度	186	88	85	28	77	45
平成28年度	171	107	82	45	77	82
平成29年度	215	143	95	72	105	40
平成30年度	206	143	99	73	80	43
令和元年度	250	152	99	73	96	36

<分析>

・全体的な海外に対する意識の大きな変化はないと考えられるが、「旅行」の増加と「いいえ」の減少には有意差を見て取れる。

・「いいえ」の回答の主な理由としては以下が挙げられている。

元々海外に興味がなく、それが変わらなかった。日本が好きだからです。

コミュニケーションできる英語能力がなく不安なため。日本で解決したい課題があるから。

これらの回答を踏まえると、数字以上に海外志向を持っている生徒がいることがわかる。【3】での減少傾向がありつつも、一方で海外へ出たい、海外を見たいという意志は強くなっていると考えられる。これから生徒たちが出ようとする日本社会に対する閉塞感を覚えつつも経済的理由を含めた様々な理由がその意志を行動に移すにあたり阻害してしまっているのではないかと考えられる。

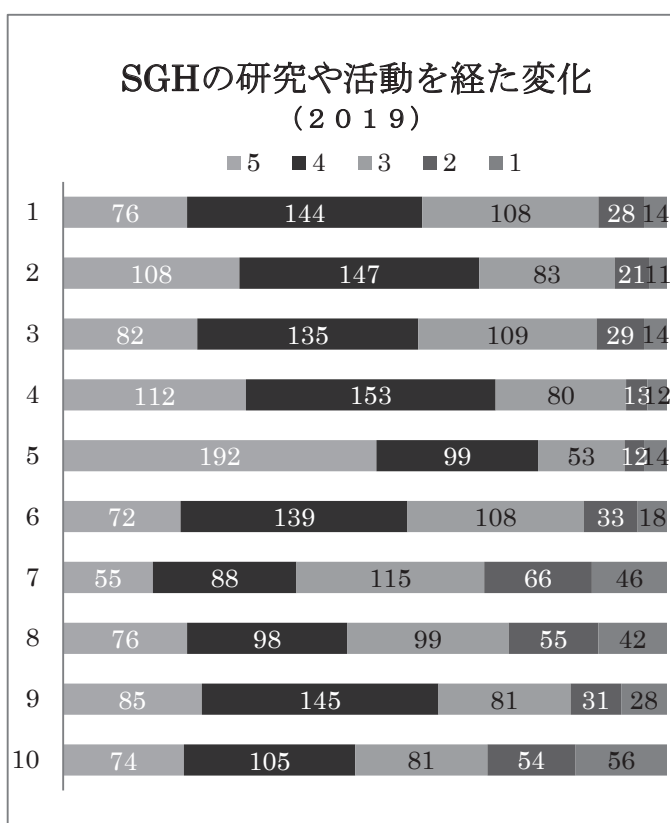
【5】SGHの研究や活動を行って変化したこと

- ①国内のニュースに興味を持つようになった。
- ②国際的なニュースに興味を持つようになった。
- ③日本のことをもっと知りたくなった。
- ④世界のことをもっと知りたくなった。
- ⑤外国語の勉強を頑張ろうと思った。
- ⑥教科の学習と世界の出来事をつなげて考えるようになった。
- ⑦将来の夢が具体的になった。
- ⑧学校外での活動が増えた。
- ⑨学んだことや感じたことを友達と議論した。
- ⑩学んだことや感じたことを新聞などに投稿した。=令和元年度、平成30、29年度は問わず)
- ⑪SGHがきっかけとなって何か新しいことを始めた。

※各項目を5段階で評価：5=強くそう思う 3=普通 1=全く思わない

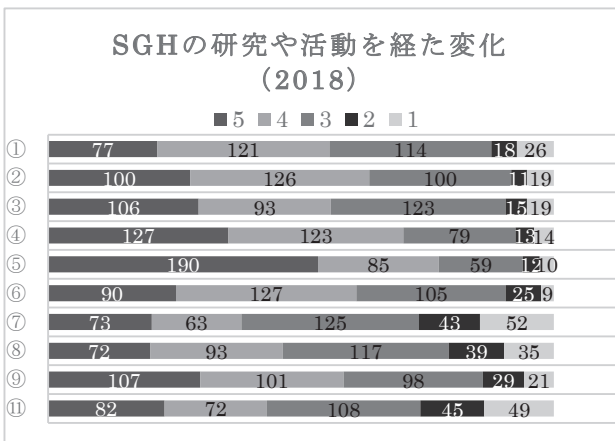
<令和元年度> (n=371)

	5	4	3	2	1
①	76	144	108	28	14
	20.5%	38.8%	29.1%	7.5%	3.8%
②	108	147	83	21	11
	29.1%	39.6%	22.4%	5.7%	3.0%
③	82	135	109	29	14
	22.1%	36.4%	29.4%	7.8%	3.8%
④	112	153	80	13	12
	30.2%	41.2%	21.6%	3.5%	3.2%
⑤	192	99	53	12	14
	51.8%	26.7%	14.3%	3.2%	3.8%
⑥	72	139	108	33	18
	19.4%	37.5%	29.1%	8.9%	4.9%
⑦	55	88	115	66	46
	14.8%	23.7%	31.0%	17.8%	12.4%
⑧	76	98	99	55	42
	20.5%	26.4%	26.7%	14.8%	11.3%
⑨	85	145	81	31	28
	22.9%	39.1%	21.8%	8.4%	7.5%
⑩	74	105	81	54	56
	19.9%	28.3%	21.8%	14.6%	15.1%



<平成 30 年度> (n=356)

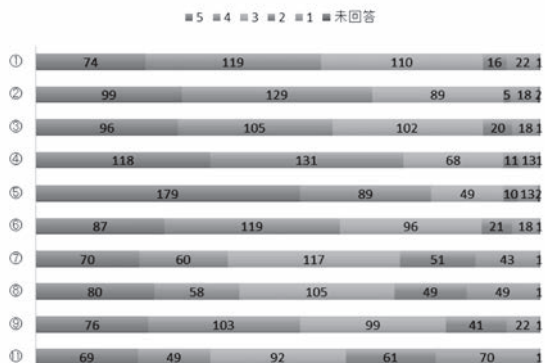
	5	4	3	2	1
①	77	121	114	18	26
②	100	126	100	11	19
③	106	93	123	15	19
④	127	123	79	13	14
⑤	190	85	59	12	10
⑥	90	127	105	25	9
⑦	73	63	125	43	52
⑧	72	93	117	39	35
⑨	107	101	98	29	21
⑩	82	72	108	45	49



<平成 29 年度> (n=342)

	5	4	3	2	1	未回答
①	74	119	110	16	22	1
②	99	129	89	5	18	2
③	96	105	102	20	18	1
④	118	131	68	11	13	1
⑤	179	89	49	10	13	2
⑥	87	119	96	21	18	1
⑦	70	60	117	51	43	1
⑧	80	58	105	49	49	1
⑨	76	103	99	41	22	1
⑩	69	49	92	61	70	1

SGHの研究や活動を経た変化 (2017)



<平成 27 年度> (n=313)

	5	4	3	2	1	未回答
①	87	105	98	7	15	1
②	107	104	79	5	17	1
③	83	104	98	10	17	1
④	113	112	67	3	17	1
⑤	138	96	58	6	14	1
⑥	59	97	118	20	18	1
⑦	78	61	105	35	33	1
⑧	53	68	108	43	39	2
⑨	55	86	102	41	27	2
⑩	34	32	86	43	117	1
⑪	41	30	91	50	98	3

<平成 28 年度> (n=308)

	5	4	3	2	1	未回答
①	87	98	101	7	13	2
②	109	98	78	8	13	2
③	90	94	97	15	10	2
④	109	91	88	8	10	2
⑤	133	94	60	11	9	1
⑥	70	77	122	18	19	2
⑦	71	68	101	38	29	1
⑧	72	52	102	38	43	1
⑨	67	78	100	33	28	2
⑩	31	24	82	45	124	2
⑪	40	37	85	39	106	1

<分析>

・昨年度と比較すると多くの質問項目で選択肢「4」が増加している。一方で「5強くそう思う」の回答数の減少も目立つ。SGH 事業が長く継続していく中で関心事や活動は生徒たちにとって「当たり前」と受け止めることが一般化しており劇的な変化とは感じなくなったと推測する。これは SGH 事業の好影響と理解することができる。

【6】SGHの3つの大テーマのうち今後世界の諸問題と向き合うために強く意識すべきものはどれだと思うか。(複数回答可)

	1 リスク	2 葛藤と軋轢	3 教育
28年度 n=308	74	105	122
29年度 n=346	112	162	152
30年度 n=357	141	203	167
令和元年度	74	144	153

＜分析＞

・全体としてこれまで以上に偏りがある。これは課題研究が深化していく中で、ただ「リスク」と向き合うだけでは不十分で、リスクを生み出している社会における「葛藤や軋轢」や、そのリスクを乗り越えるための「教育」などこそが真に向き合うべきものとの意識の表れであろう。

【7】課題研究を進めるにあたってどのような教科の学習と最も関連があると思ったか。(複数回答可)

	1 すべて	2 国語	3 数学	4 理科	5 社会	6 英語	7 保健 体育	8 芸術	9 技術 家庭	10 情報	11 国際 教養
28年度 n=308	43	27	34	48	120	48	27	13	23	21	46
29年度 n=346	110	74	60	58	153	109	17	35	25	68	88
30年度 n=357	135	69	49	61	148	86	12	29	19	63	82
令和元年度 n=371	96	68	53	58	164	77	18	29	20	40	77

＜分析＞

・「すべて」の回答数が大きく減少した。研究に際し、多様な力が求められることを理解する一方で、課題の焦点化と共に関連する学問領域の絞り込みも進んだのではないかと推測する。

・「英語」の回答が2年連続で減少している。これまでは「SGHもしくは世界」＝「英語」という単純な思い込みは十分解消されたと思われるが、その一方で昨年減少した「社会」が今年度の調査では大きく増加した。本調査はSGHや文系領域の研究をしている生徒のみを対象としているのではなく、SSHや理系分野も含めた「課題研究」との関連において、改めて「社会、地歴・公民」とのつながりを重視していることは興味深い。いかなる研究であろうとそこに社会との繋がりを見出しているのであろう。

【8】課題研究を進める上でどのような方法を活用しているか。(複数回答可)

	1 実験	2 アンケート	3 文献調査	4 ディスカッション	5 グループワーク	6 インタビュー	7 外部連携	8 セミナーや研修
28年度 n=308	68	81	165	39	64	74	62	62
29年度 n=346	137	134	253	66	83	141	127	78
30年度 n=357	142	164	264	94	80	159	120	75
令和元年度 n=371	127	159	287	61	68	158	124	78

<分析>

- ・文献調査が微増した。課題研究はあくまでも「研究」であり、先行研究等を丁寧に実施していくことの重要性が十分定着したと理解できる。
- ・ディスカッション及びグループワークが減少している。一方で、【5】の友達と課題について議論したという回答が増えている。これについては日常生活での議論と、研究としての活動を切り分けているのではないかと思われる。そう考えるならば、4ディスカッションの数値の減少はネガティブに捉えるものではなく、むしろ日々議論することが当たり前環境の中で生活し、そこで深めた問題意識を「研究」に転換させていくという姿は高く評価すべきである。

【9】SGHの活動や研究を通して身についたスキル（※IBのATLスキルとの関わり）

各スキルを5段階で評価

5非常に身についた 4やや身についた 3変化なし 2やや下がった 1非常に下がった 0わからない

28年度 n=308	5	4	3	2	1	0	未回答
①コミュニケーション	66	113	89	6	4	16	14
②協働	68	122	83	5	3	16	11
③整理整頓	54	103	107	12	6	15	11
④情動	45	89	125	8	9	20	12
⑤振り返り	57	121	90	10	4	15	11
⑥情報リテラシー	81	109	85	4	4	13	12
⑦メディアリテラシー	70	114	89	3	5	16	11
⑧批判的思考	78	110	87	4	2	16	11
⑨創造的思考	61	121	91	6	4	14	11
⑩転移	61	98	112	5	6	15	11

29年度 n=346	5	4	3	2	1	0	未回答
①コミュニケーション	85	170	68	2	1	12	4
②協働	96	143	83	6	1	11	2
③整理整頓	75	128	117	7	1	12	2
④情動	55	120	135	11	4	15	2
⑤振り返り	78	163	78	4	4	13	2
⑥情報リテラシー	97	158	69	5	0	11	2
⑦メディアリテラシー	85	148	93	3	1	10	2
⑧批判的思考	95	149	76	10	0	10	2
⑨創造的思考	85	133	107	5	0	10	2
⑩転移	66	154	103	4	1	12	2

30年度 n=356	5	4	3	2	1	0
①コミュニケーション	94	177	67	5	0	13
②協働	86	172	84	4	2	8
③整理整頓	77	156	103	11	2	7
④情動	59	122	146	17	5	7
⑤振り返り	84	189	73	4	2	4
⑥情報リテラシー	118	158	71	2	1	6
⑦メディアリテラシー	100	173	72	5	1	5
⑧批判的思考	120	156	64	6	3	7
⑨創造的思考	82	163	93	10	1	7
⑩転移	67	173	97	10	0	9

令和元年 n=371	5	4	3	2	1	0	無回答
①コミュニケーション	78	162	98	17	7	7	2
	21.0%	43.7%	26.4%	4.6%	1.9%	1.9%	
②協働	77	153	106	24	5	4	2
	20.8%	41.2%	28.6%	6.5%	1.3%	1.1%	
③整理整頓	46	129	139	35	11	7	4
	12.4%	34.8%	37.5%	9.4%	3.0%	1.9%	
④情動	43	139	123	42	13	6	5
	11.6%	37.5%	33.2%	11.3%	3.5%	1.6%	
⑤振り返り	70	150	104	30	7	7	3
	18.9%	40.4%	28.0%	8.1%	1.9%	1.9%	
⑥情報リテラシー	79	163	93	19	5	9	3
	21.3%	43.9%	25.1%	5.1%	1.3%	2.4%	
⑦メディアリテラシー	70	146	118	20	8	7	2
	18.9%	39.4%	31.8%	5.4%	2.2%	1.9%	
⑧批判的思考	91	151	99	19	3	6	2
	24.5%	40.7%	26.7%	5.1%	0.8%	1.6%	
⑨創造的思考	64	138	128	24	7	7	3
	17.3%	37.2%	34.5%	6.5%	1.9%	1.9%	
⑩転移	48	154	121	33	6	7	2
	12.9%	41.5%	32.6%	8.9%	1.6%	1.9%	

<分析>

・「5 非常に身についた」「4 やや身についた」合算でほとんどが 50%を超えているが、「③整理整頓スキル」と「④情動スキル」だけが5割をわずかに下回っている。この2つは「1 非常に下がった」の選択をした割合も他のスキルに比べて高い。これは例年と同じような傾向であるが、だからといって、本校生徒が他校比較においてこれらのスキルに欠けているとは思えない。これについては下がったというよりは、今までメタ認知する機会があまり無かったスキルについて、課題研究や後期課程の学習などで多忙感を感じる中で自己評価よりも整理する力や情動の力が無かったことに対する「気づき」があったのではないかと推測する。(なおATLスキルにおける情動スキルとはIBにおいて「気配り、粘り強さ、感情管理、自発性、立ち直る力」と定義されている)

4.2 ISS チャレンジによる生徒の変容

ISS チャレンジでは、生徒課題研究の「研究実施計画書」（提出 5 月）「研究経過報告書」（同 10 月）「研究論文」（同 1 月）「フィールドノート」（同 1 月）に対して、教員がルーブリックを用いて観点別評価を行う。これは、ISS チャレンジが課題研究の校内コンペティションでありその選抜に用いるためでもあるが、それ以上に、研究のプロセスを適切に評価することで生徒の成長を意図したものである。同様の趣旨から、生徒自身にも 5 月と 1 月に自己評価を行わせ、7 月と 9 月には外部評価会を設けている。これらの評価はすべて数値で表現されるとともに文章でも表現され、生徒にフィードバックされる。今年度 ISS チャレンジで SGH 課題研究を一年間継続した 56 チームに対する評価結果を分析し、以下のような考察を得た。この考察結果は過去の 2 年間の分析とほぼ同じであり、高校生の課題研究において普遍的に見られる傾向だと結論付けたい。

- ・最優秀／優秀チームは計画書段階での「研究目的」「実現可能性」「内容妥当性」評価が高い。
- ・最優秀／優秀チームは経過報告書段階での「メタ認知」評価が高い。
- ・最優秀／優秀チームは最終論文での「調査方法・内容」評価が高い。
- ・評価上昇チームは経過報告書段階での「メタ認知力」「外部連携」評価が高い。
- ・評価上昇チームは計画書段階で「実現可能性」の低さを指摘されるが、経過報告の時点で十分改善され「研究遂行」で高い評価を受けるようになっている。
- ・評価下降チームは経過報告書、フィールドノートでの「外部連携」評価が低い。
- ・質の高い研究を実現するために、早い段階で外部評価など多様な振り返りの機会を持たせる必要がある。

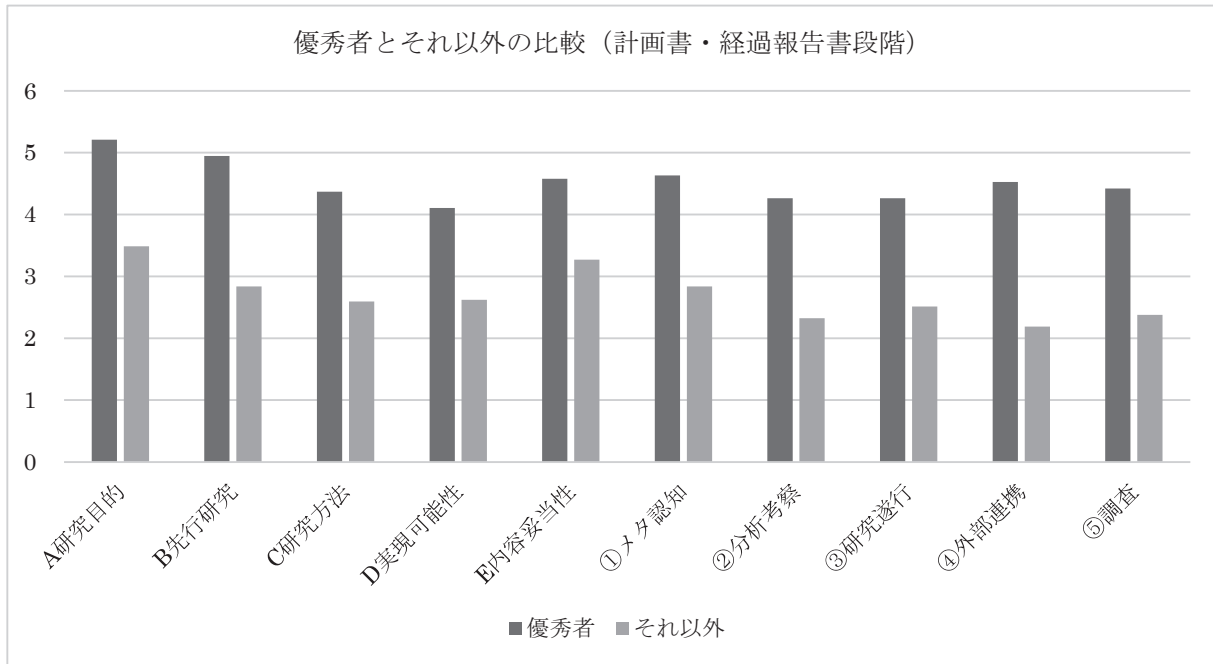
※なお、課題研究における外部評価のもたらす意義と価値については本報告書 5-1.1 及び 5-1.2 も併せて確認していただきたい。

〈分析 1〉セミファイナリスト以上とそれ以外の比較

今年度の ISS チャレンジでは、最終的にファイナリスト（最優秀賞）4 チームとファイナリスト（優秀賞）15 チームを選抜した。教員によるルーブリック評価について、この 19 チームとそれ以外のチームとを「研究計画書」段階と「研究経過報告書」段階で比較したのが下表【1】及びグラフである。最終的に成果を出した研究は、計画書段階から全ての観点において優位にあるが、特に計画書での「B 先行研究」「A 研究目的の明確さ」は高い値を示している。また、経過報告書では「①メタ認知」と「④外部連携」が高くなっている。特に「④外部連携」は「それ以外」のグループとの差も大きく、研究序盤や中盤のプロセスにおいてこれらの要素が重要であることが分かる。

表【1】セミファイナリスト以上とそれ以外の比較（研究計画書・研究経過報告書段階）

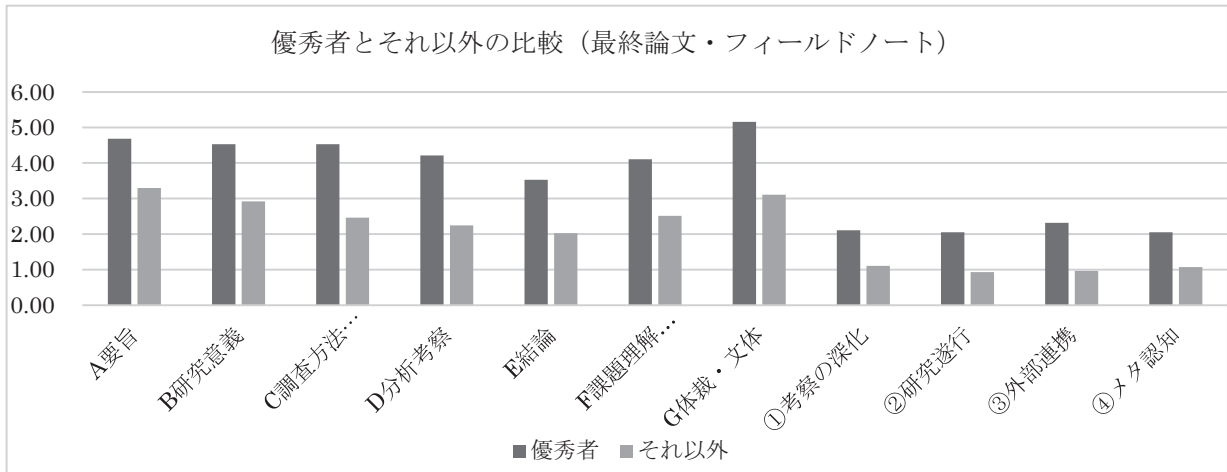
観点	研究計画書（5月）						研究経過報告書（10月）					
	A研究目的	B先行研究	C研究方法	D実現可能性	E内容妥当性	合計	①メタ認知	②分析考察	③研究遂行	④外部連携	⑤調査	合計
最高水準	6	6	6	6	6	30	6	6	6	6	6	30
優秀者	5.21	4.95	4.37	4.11	4.58	23.21	4.63	4.26	4.26	4.53	4.42	22.11
それ以外	3.49	2.84	2.59	2.62	3.27	14.81	2.84	2.32	2.51	2.19	2.38	12.24
差	1.72	2.11	1.77	1.48	1.31	8.40	1.79	1.94	1.75	2.34	2.04	9.86



表【2】は「最終論文」と「フィールドノート」段階の評価の比較である。「最終論文」はやはりセミファイナリスト以上のチームは全般的に高い値を示すが、特に「A 要旨」「B 研究意義」「C 調査方法・内容」が高評価であり、「それ以外」との差も大きいことが目を引く。高校生の課題研究は、調査が科学的方法に則って行われており妥当な考察が行われていることが成否を分ける鍵であることが分かる。併せてセミファイナリスト以上の特徴として「G 体裁・文体」が極めて高いことが挙げられる。高く評価される論文を執筆するためには研究内容の充実はもちろんのこと、定められた論文執筆要項をきちんと守れるということも不可欠な要素である。なお、フィールドノートの「それ以外」の平均値は提出者のみで算出しており、未提出者を0点とカウントして算出するとその差はさらに開く。研究過程の記録を丁寧に多角的に行い、適切な時期に適切に振り返りを行うことが研究活動の充実につながることで改めて浮き彫りとなった。

表【2】セミファイナリスト以上とそれ以外の比較（最終論文・フィールドノート）

観点	最終論文（1月）								フィールドノート			
	A要旨	B研究意義	C調査方法・内容	D分析考察	E結論	F課題理解の深化	G体裁・文体	合計	①考察の深化	②研究遂行	③外部連携	④メタ認知
最高水準	6	6	6	6	6	6	6	42	3	3	3	3
優秀者	4.68	4.53	4.53	4.21	3.53	4.11	5.16	30.74	2.11	2.05	2.32	2.05
それ以外	3.30	2.92	2.46	2.24	2.03	2.51	3.11	18.57	1.11	0.93	0.96	1.07
差	1.39	1.61	2.07	1.97	1.50	1.59	2.05	12.17	1.00	1.12	1.35	0.98



〈分析2〉評価上昇群と下降群の比較

研究計画書と最終論文・フィールドノートの評価を比べ、研究のプロセスにおいて、計画書段階の順位から最終論文とフィールドノートの評価を合計した数値における順位を引いて算出した数値の上下それぞれ25%に相当する14チームを上昇群及び下降群と定義して比較を行った（下図【3】【4】）。計画書段階では下降群のほうが高い評価を得るケースが多かったが、経過報告書段階で逆転し、全ての項目平均値で上昇群の方が良い評価を得ている。なかでも研究経過報告書の「④外部連携」と「①メタ認知」で有意差が出ている。

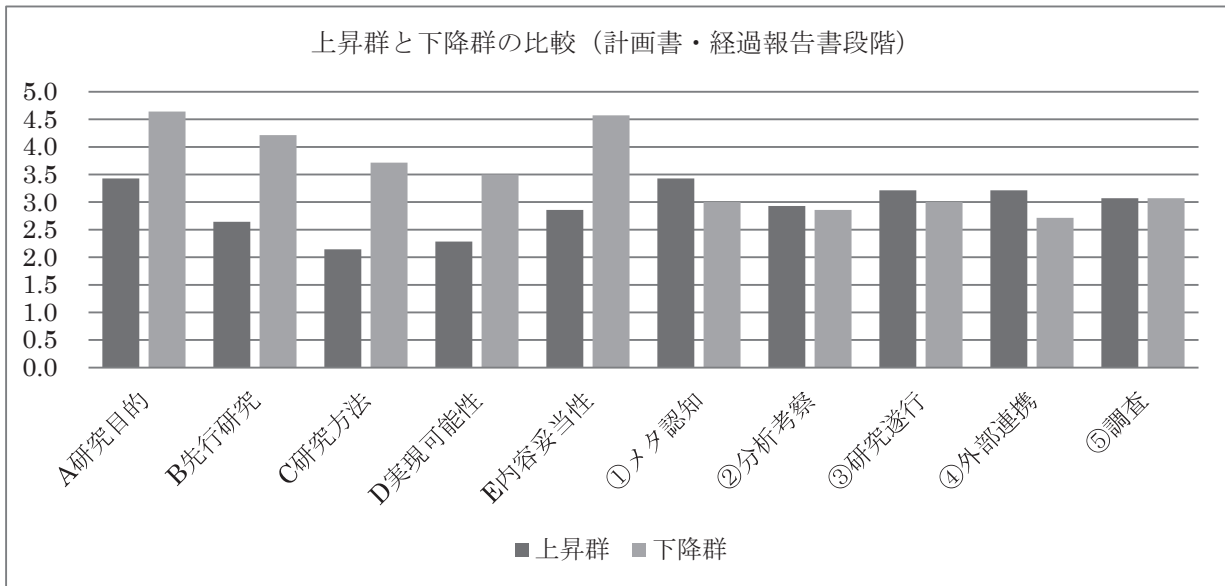
生徒たちが一年間かけて課題研究の水準を上げていくためには、調査をきちんと行う研究遂行力が必要なのはもちろんだが、外部の専門家や問題の当事者につながる組織力・対話力及び自分の研究を批判的・客観的に見る視点が重要であることが分かる。

さらに注目すべき点として、計画書での「D実現可能性」は上昇群の方が明らかに低かったにもかかわらず経過報告書では「③研究遂行」で下降群との評価が逆転している。計画段階では実現性が疑わしかった研究テーマも外部からの評価や自らの振り返りを経ることによって具体性を持った現実的な研究テーマへとブラッシュアップされていったと考えられる。

昨年の報告書でも指摘したことではあるが、早い段階での研究に対する躰きを明らかにし、研究遂行を高めるためにもメンター教員や外部評価会等を積極的に活用していくことが肝要である。

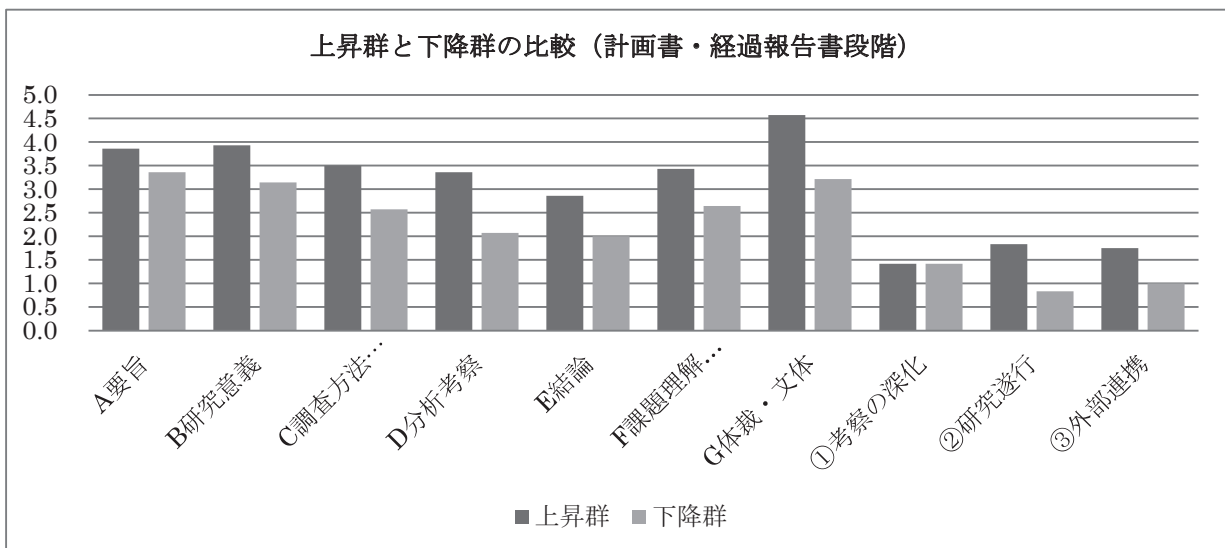
【3】評価上昇群と下降群の比較（研究計画書・研究経過報告書段階）

観点	研究計画書（5月）						研究経過報告書（10月）					
	A研究目的	B先行研究	C研究方法	D実現可能性	E内容妥当性	合計	①メタ認知	②分析考察	③研究遂行	④外部連携	⑤調査	合計
最高水準	6	6	6	6	6	30	6	6	6	6	6	30
上昇群	3.43	2.64	2.14	2.29	2.86	13.36	3.43	2.93	3.21	3.21	3.07	15.86
下降群	4.64	4.21	3.71	3.50	4.57	20.64	3.00	2.86	3.00	2.71	3.07	14.64
差	-1.21	-1.57	-1.57	-1.21	-1.71	-7.29	0.43	0.07	0.21	0.50	0.00	1.21



【4】評価上昇群と下降群の比較（最終論文・フィールドノート）

観点	最終論文（1月）								フィールドノート			
	A要旨	B研究意義	C調査方法・内容	D分析考察	E結論	F課題理解の深化	G体裁・文体	合計	①考察の深化	②研究遂行	③外部連携	④メタ認知
最高水準	6	6	6	6	6	6	6	42	3	3	3	3
上昇群	3.86	3.93	3.50	3.36	2.86	3.43	4.57	25.50	1.42	1.83	1.75	1.58
下降群	3.36	3.14	2.57	2.07	2.00	2.64	3.21	19.00	1.42	0.83	1.00	1.17
差	0.50	0.79	0.93	1.29	0.86	0.79	1.36	6.50	0.00	1.00	0.75	0.42



4.3 進路とSGHの関わり

6年生アンケート集計結果と分析

過去3年度のアンケート集計結果と比較すると、2018年度を除き、ポジティブな選択項目は増加傾向にある。

SGHの活動実績を進路や入試で利用した生徒数が21名となり、学年在籍生徒数の約17パーセントとなっている。

昨年度、および今年度のISSチャレンジのファイナリスト・セミファイナリスト経験者の75パーセントは特別入試で難関大学の合格を得ている。

進路を考えるに際してSGHの活動が有効であると考えている生徒が29名、回答者の26パーセントである。大学入試出願や受験に際してSGHの活動による影響や効果があると答えた生徒が75名、回答者の67.5パーセントであり一昨年とほぼ同じ傾向である。

(1) 目的

SGH研究開発事業を通して、生徒がどのような意識の変容を見せるか、また課題研究の取り組みやSGHに関連する活動がどの程度進路選択や進路決定に影響を及ぼすかを調査・分析する。

(2) 実施概要

調査時期 2020年1月下旬

対象 本校6年生(回収数111名/学年在籍数127名)

(3) 前年度に引き続き、最終学年である中等6年生(有効回答数111名)に対し、進路との関わりについてアンケートを行った。アンケート項目と回答数は次ページ以降に示した通りである。比較対象として、過去3年度分の回答状況も掲載する。

これまでと比べ、今年度のSGHの活動実績を利用したと回答した生徒数は減少した。「SSHとSGHの活動実績を両方使った」という生徒を含めても21名である。しかし、2016年度及び2017年度との経年変化の比較ではSSH、SGHともに入試に利用した生徒は増加しており、むしろ2018年度が特異な年であったのではないかと推察される。

項目②の「どのような入試で活用したか」に対する回答では、2「自己推薦入試・AO入試に利用した」というべ生徒数が選択項目中最大数の11名であり、SGHでの課題研究が入試において重要な自己アピールとなっていることが分かる。

次に項目③の回答状況について。昨年度の分析において「外部で発表した生徒全員が受賞できたわけではないが、他校の高校生や教員、あるいは大学教授などの専門家の前で発表をし、研究や発表に対して客観的な評価を得るといった経験は生徒の研究者としての素養を育み、また、それらの活動や実績は大学入試において影響があると言える。」と指摘した。この傾向は今年度も続いており、特に課題研究での受賞という成果は大学における入学選抜の基準を十分に満たす、高い評価が得られるものであったといえる。

例年の傾向とあまり差が無い項目④の中で、顕著な変化を示したのは2「外部での活動(SSH/SGH以外)」が大幅に減少していることである。SSHやSGHは「サイエンス」や「グローバル」の名を冠しているがその対象は極めて広いということを生徒も理解を深めており、あえてSSHやSGHという枠組みを活用しない生徒は少なくなっていると推測する。

項目⑥も、これまでの分析の同じく、2017年度と近い傾向を示している。

最後に、昨年度と今年度において優秀な研究成果を残した生徒の進路状況について記載する。ISSチ

チャレンジ（校内の課題研究コンペティション）の最終選考に残ったファイナリスト（上位4組）・セミファイナリスト（ファイナリストに次ぐ14もしくは15組）の経験のある6年生は、のべ8組23名である。このうち、2019年度現在で特別入試・海外入試を含めてすでに合格を得ている生徒は10名である。

合格先・進学先（予定）としては、早稲田大学・慶應義塾大学・上智大学・立教大学・中央大学・青山学院大学などが挙げられる。16名全員がSGHの成果を活用して合格を決めたわけではないが、全体として課題研究における上位層はその成果を活用して難関大学と言われる大学への合格・進学をするという傾向が見受けられる。

SSH/SGHの活動実績と進路の関係についてのアンケート 2019年度

今年度入試でSSH/SGHの実績を活用したか						
①		SSH	SGH	両方	利用せず	計
		6	18	3	84	111

どのような入試に活用したか						
②		SSH	SGH	両方	利用せず	計
1	推薦（公募・指定校）	2	1	2	/	5
2	自己推薦・AO	4	11	2		17
3	帰国	0	2	0		2
4	国内その他	0	0	0		0
5	海外大学	1	5	0		6
6	その他※	1	0	0		1

※SSHで「高大接続」

どのようなことを活用したか						
③		SSH	SGH	両方	利用せず	計
1	課題研究の成果	4	15	2	/	21
2	課題研究外部発表	2	7	1		10
3	課題研究受賞	2	10	1		13
4	国内研修の経験	3	3	0		6
5	海外研修の経験	1	7	2		10
6	その他※	0	2	0		2

※「研究で出会った方々から推薦を頂いた」（もう一人は未記入）

SSH/SGHの実績以外で今年度入試に活用したもの						
④		SSH	SGH	両方	利用せず	計
1	外国語の資格	4	10	3	47	64
2	外部での活動実績（SSH/SGH以外）	4	6	1	14	25
3	習い事の成果	0	1	0	7	8
4	コンテストの表彰実績（SSH/SGH以外）	2	6	0	12	20
5	その他※	0	0	0	3	3
6	なし	1	0	0	33	34

※「留学」「課題研究」「DPでの学習成果（スコアではなくEEやIAの内容）」

SSH/SGHの課題研究や研修活動を通じて進路に対する考えに変化や影響はあったか						
⑤		SSH	SGH	両方	利用せず	計
1	あった	5	13	2	14	34
2	なかった	1	5	1	70	77

どのような変化があったか（⑤で「あった」のみ回答）						
⑥		SSH	SGH	両方	利用せず	計
1	進路を考え直した	1	4	1	2	8
2	進路が定まった	3	4	0	6	13
3	進路に対する理解が深まったり、広がったりした	3	7	2	6	18
4	進路に対する迷いが強くなった	1	2	0	2	5
5	国際関係や海外進学への興味や意志を持つようになった	2	1	0	2	5
6	外国語（英語含む）能力の重要性を実感した	2	4	0	1	7
7	その他	0	0	0	0	0

大学入試を含む進路を考えるに際してSSH/SGHの活動は有効か						
⑦		SSH	SGH	両方	利用せず	計
1	有効だと思う	3	5	1	20	29
2	有効な部分もある	3	12	2	56	73
3	有効でないと思う	0	0	0	7	7

大学入試の出願・受験においてSSH/SGHの活動実績は影響や効果があるものだと思うか						
⑧		SSH	SGH	両方	利用せず	計
1	影響や効果がある	4	13	3	55	75
2	影響や効果は無い	2	2	0	20	24
3	その他※	0	2	0	8	10

※影響や効果が全くないとは言わないが、それが必ずしも良い影響とは限らない
 ※「判断できない」のような内容が9名

（図1 進路とSGHの関わり－6年生アンケート集計結果 2019年度）

SSH・SGHの活動実績と進路の関係についてのアンケート 2016～2018年度

Question		Answer	n=126 2018年度	n=126 2017年度	n=87 2016年度
①	今年度の入試においてSSH/SGHの活動実績を活用しましたか？	1 SSHの実績を使った	11	3	3
		2 SGHの実績を使った	29	14	15
		3 両方の実績を使った	1	0	1
		4 使わなかった	84	109	68
②	(① 1～3回答者) 使った人はどのような入試で活用しましたか	1 推薦入試(公募制・指定校)	17	4	6
		2 自己推薦入試・AO入試	24	11	11
		3 帰国生入試	2	1	3
		4 国内のその他の入試	2	2	1
		5 海外大学の入試	6	3	3
		6 その他	1	2	0
③	(① 1～3回答者) 使った人はどのようなことを活用しましたか	1 課題研究の成果	34	13	13
		2 課題研究を外部で発表したこと	21	5	4
		3 課題研究で受賞したこと	21	11	6
		4 国内研修の経験	7	2	4
		5 海外研修の経験	18	4	5
		6 その他	6	1	2
④	SSHやSGHの活動実績以外で、今年度の入試において活用した実績はどのようなものがありますか？(複数回答可)	1 外国語の資格	76	74	42
		2 外部での活動実績(SSH・SGHに関連しない活動)	42	45	21
		3 習い事の成果	18	19	10
		4 コンテストの表彰実績(SSH・SGHに関連しない実績)	22	25	14
		5 その他	12	13	6
		6 使ったものはない	42	41	39
⑤	SSHやSGHの課題研究や研修活動などを通して、進路に対する考えに変化や影響はありましたか？	1 あった	35	35	23
		2 なかった	74	90	63
⑥	⑤番の質問で、「1 あった」と回答した人にお尋ねします。どのような変化や影響がありましたか？(複数回答可)	1 進路を考え直した	9	7	3
		2 進路が定まった	11	10	9
		3 進路に関する理解が深まったり、広がったりした	33	20	16
		4 進路に関する迷いが強くなった	10	4	0
		5 国際関係や海外進学への興味や意志を持つようになった	15	6	6
		6 外国語(英語含む)能力の重要性を実感した	14	8	3
		7 その他	3	3	0
⑦	大学入試を含む進路を考えるに際して、SSHやSGHの活動は有効だと思いますか？	1 有効だと思う	33	27	21
		2 有効な部分もある	81	83	51
		3 有効ではないと思う	11	16	15
⑧	大学入試の出願・受験においてSSHやSGHの活動実績は影響や効果があるものだと思いますか？	1 影響や効果がある	99	86	53
		2 影響や効果はない	22	27	25
		3 その他	5	12	6

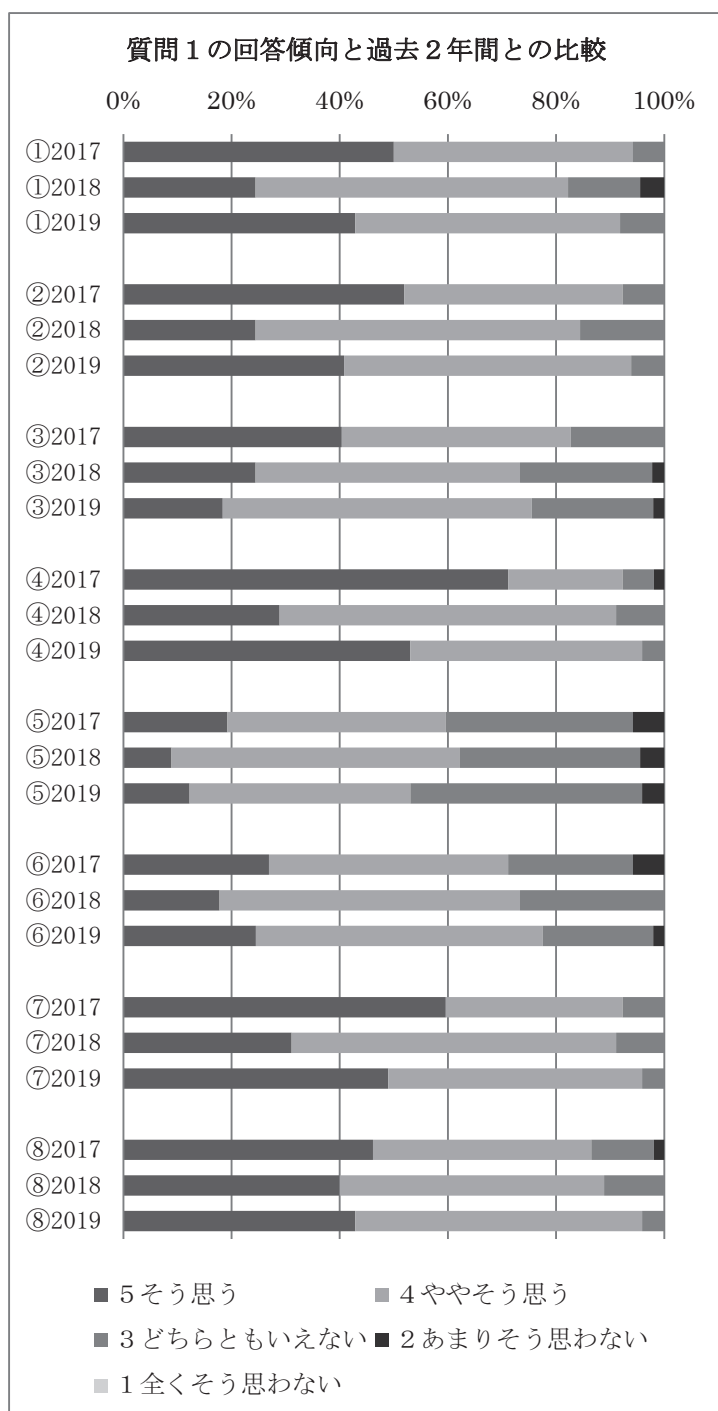
(図2 進路とSGHの関わり—6年生アンケート集計結果 2016年度、2017年度、2018年度)

4.4 教員の意識と評価

- ・ 回答数 n=49 (2017年度回答数 n=52 2018年度回答数 n=45)
- ・ 全体的な回答の傾向は変化なく、前年度同様、生徒にとってのSGH事業に意義や価値を見出しはいるものの、授業改善やカリキュラム改善に対する意義や価値をやや見いだせていないように思われる。
- ・ 肯定的評価は前年度とほぼ同じであるが、「ややそう思う」という消極的な肯定がふえている。

今年度も教員向けにもアンケートを実施した。質問項目とともに集計結果を以下に掲げる。

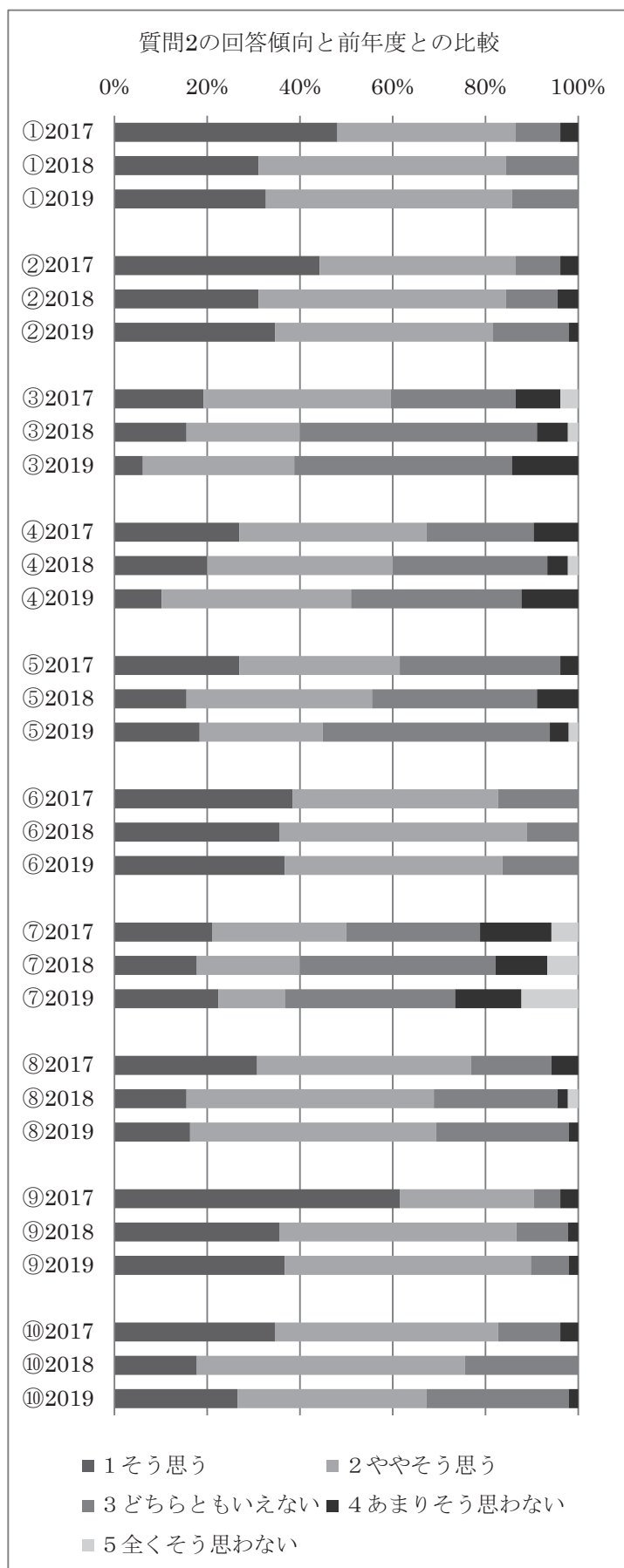
質問1 SGH事業を行うことの効果について



- 質問項目
- ① 生徒の課題研究への意識や意欲の向上
 - ② 生徒の社会問題への意識や関心の向上
 - ③ 生徒の進路選択への良い影響
 - ④ 外部講師による講演や支援の生徒への有効性
 - ⑤ 授業改善やカリキュラム改革のための有効性
 - ⑥ 教員の指導力向上・指導範囲の広がりへの有効性
 - ⑦ 学校・教員・生徒と校外の機関・組織との連携への有効性
 - ⑧ 学校の取組を校外に理解してもらうことへの有効性

<分析>
 多くの項目において前年度と比べて「そう思う」と回答する割合は増加しており、一昨年と同じような傾向を示している。一方で③は昨年度より減少しているが「そう思う」「ややそう思う」の合計は3年間を通じて大きく変わっていない。SGH事業が何に反映され、何に反映されづらいかは教員層が変化しても普遍的なものであったと思われる。

質問2 SGH 事業を通じた教員自身の変化・変容



- 質問項目
- ① 課題研究への意識や関心への良い変化
 - ② 社会問題への意識や関心の高まり
 - ③ 授業内容や授業設計の改善
 - ④ 授業や課題研究における指導方法の良
い変化
 - ⑤ 探究的な授業の導入
 - ⑥ 生徒への味方の変化(生徒の新たな面や
能力・弱点の発見)
 - ⑦ 校外の機関・組織との連携
 - ⑧ 「グローバル社会で生きる資質・能力」
への思考の深まり
 - ⑨ 自身の研修の必要性(国内外問わず)
 - ⑩ 本校への関心の高まり

<分析>全体的な傾向は一昨年度より前年度に近い。いくつかの項目で「1 と思う」が減少しているが、「1 と思う」と「2 ややと思う」の合算値で見れば同じ傾向といえる。⑨の質問項目については「1 と思う」と答えた割合が減少したままなのもあまり変化がない。5年間に及ぶSGH認定校としての事業が終了するが教員自身が学ぶべきという意識の向上は継続して仕掛けていく必要がある。

質問3 課題研究によるATLスキルの習得（生徒）について

質問3は課題研究を通して生徒がどのようなスキルを身につけたと思われるかについての調査である。

		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩		
5	2019年度	14	12	5	1	10	9	7	9	9	4	x軸（スキル） ①コミュニケーション ②協働 ③整理整頓 ④情動 ⑤振り返り ⑥情報リテラシー ⑦メディアリテラシー ⑧批判的思考 ⑨創造的思考 ⑩転移	
	2018年度	9	3	3	2	9	13	7	10	9	2		
	2017年度	15	16	9	4	12	14	13	10	9	6		
	2016年度	10	6	4	1	8	12	11	11	10	3		
4	2019年度	28	29	23	22	28	33	34	24	22	24		y軸（評価） 5非常に身についた 4やや身についた 3変化なし 2やや下がった 1非常に下がった 0わからない
	2018年度	35	32	23	13	24	33	34	29	29	28		
	2017年度	29	29	29	23	30	31	32	36	36	34		
	2016年度	34	35	31	18	33	31	32	39	34	35		
3	2019年度	5	6	16	19	10	6	6	14	14	15		
	2018年度	5	13	19	27	13	3	8	9	12	17		
	2017年度	6	4	11	21	8	5	4	3	5	10		
	2016年度	1	4	9	23	3	2	2	4	1	6		
2	2019年度	0	0	4	3	0	0	0	1	1	0		
	2018年度	1	1	2	2	0	1	1	0	0	1		
	2017年度	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	2016年度	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
1	2019年度	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	2018年度	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0		
	2017年度	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	2016年度	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
0	2019年度	2	2	1	4	1	1	2	1	3	6		
	2018年度	2	3	4	8	5	2	2	4	2	4		
	2017年度	1	2	2	3	1	1	2	1	1	1		
	2016年度	0	0	1	3	1	0	0	0	0	2		

<分析>

本校の教員集団の質的・量的変化も要因としては考えられるが、全体として昨年度に比べ以下のような傾向がある。

- ・多くのATLについて、昨年度よりも「5非常に身についた」の割合が増加し、「4やや身についた」の回答や「3変化なし」の回答が減少している。
- ・昨年度より「2やや下がった」が増加したATLスキルがある。
- ・「1非常に下がった」の回答は今年度は無かった。
- ・昨年度に比べ「0分からない」の回答は微減した。

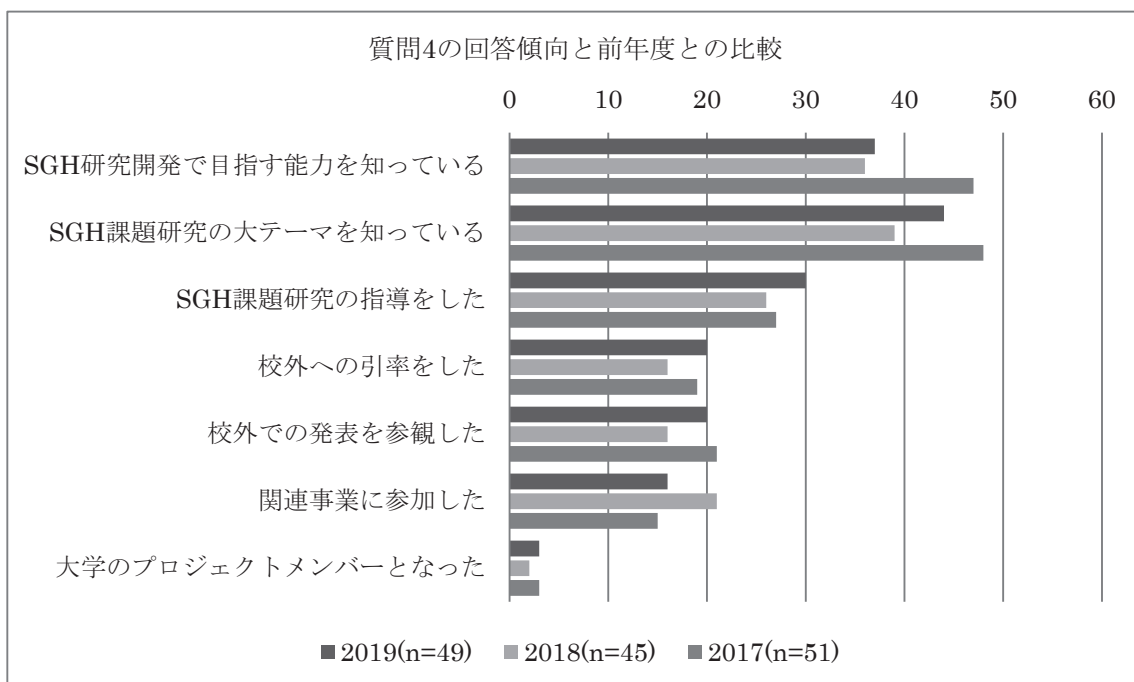
<要因分析>

- ・SGHとしての経験が積み上がり、教員集団の規準が一定の高さ（厳しさ）を持つようになっており、生徒への評価が辛めになってきている。
- ・整理整頓スキルと情動スキルのネガティブ評価については生徒の自己評価と一致しており、生

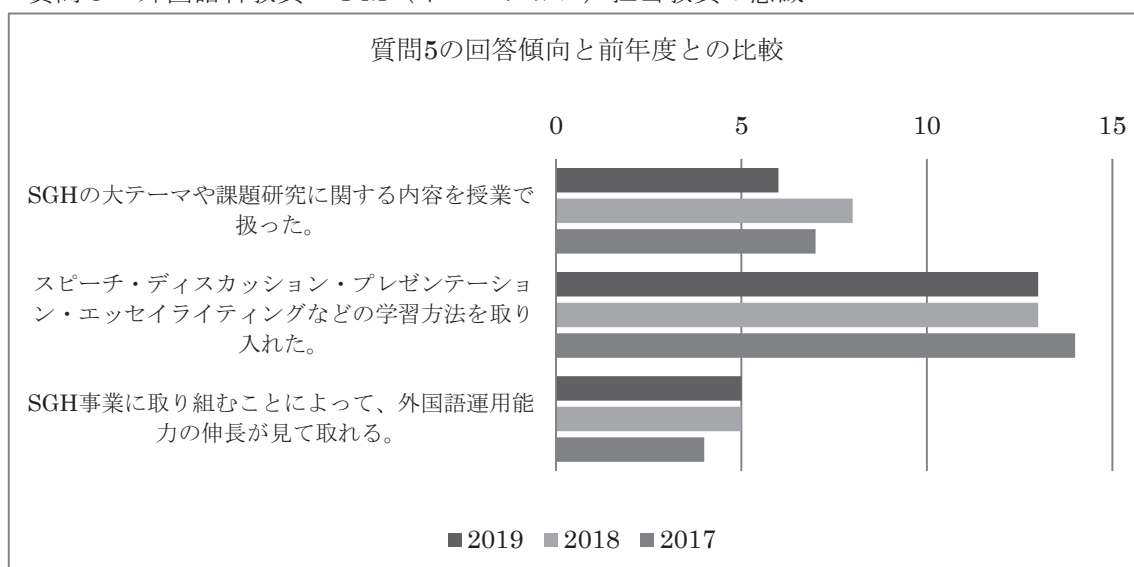
徒の「あれもこれも」と手を出してしまったがゆえの多忙感と、そこから生じる負の効果は実存するとみなすべきであろう。

- ・本校の特性として、多くの都道府県から IB 研修教員を受け入れており、その教員が短期に入れ替わることから、ATL スキルへの理解が十分に浸透していると言い難く、課題研究と ATL を関連付けて考えられる教員層に変動が出やすい。

質問 4 これまでの SGH 事業との関わりについて



質問 5 外国語科教員・IM（イマージョン）担当教員の意識



<分析>

昨年度の分析同様、質問 4・5 ともに大きな傾向の変化はないが、「目指す能力」と「大テーマ」についての更なる浸透が確認できる。